古今和歌集正義

序本

二

阿波文庫

やまとうたい人のこころをさとりてよる月のことをもてあそ
ばまほしくなる

やまと歌いかゝ[illegible]むかしの名迹をのこす常に大和言葉にもいと
なつかしくすれども紀氏の家集にもやまとうたをまなぶる人
をもてとゝまるまゝ順集にやまと言のえらふをもて梨壺に於の
を弾ひろく高光集にやまとうたをとりてくに伊勢物語にや
まと歌にやまとなりなんまい言葉にまこゝろのこゝ
ろをもてこい詩のさゝえとなるよりて称なるべし
たゞ人の異聖のまこゝろをもて技こゝろのこゝろなるべい大和聖と名つけ唐聖夷
の反をやされて本よりあるをたゞかくしこゝろをもちゆふ歌ひ也さて詩
学をうんぬ行もまこゝ言葉ハ人をまこゝ堅固にまなりて学ぶおとゝろ

阿波文庫

（まことにうたがひ撰集の事かの異さまに世よあひく其勅
をさへ四つ所しまいく世道をおもやうなる復さんの仏より我やま
と言ひとけまてつつもさい世俗乃稱（よ従ひく其意を富し
たる也 序の全言こよあもんをひらひくひるへ人乃こて
ろをさいんのうつりまるく幾千よろ川乃云れとなりゆ
くをつふとれ第い言の端乃言ふくつめくいことなとつふ俗よ
にのたるかるなとつふたる同しくとと四をそめ言をつふもさ
て奇い言れとしをろこあふ世ものなまいおまるみるくことろ
ともひなつ四を今いその端を草本乃第ふよをてんを掩
とつるよむつ人まるを文乃あやなる 雜名れ釈業第云人聲四歌
こ杓也訓歌々言其貨也以

聲冷泉有上下如草本之有中杓業也とつるよよをて業をこく其本
其学とおるることく言よりてんを言るよをこあたとつかとつるを其
文言を組をさるろこなるすを國
言乃ふりをもおるる杜撰乃法也 題脈乃古今抄よい貫之集よ
ひとつんを撰とてとつのをとつをてをさいおとつろつを後
よのとあやまをつるまやあらんをまと今流布れ貫之集よ
いをることをみるを拾をるよ一つんをひとつ乃まんをつふ乃
た第つとをこ對しく世第義このたりつるよ似つを この歌注れひと
つんよりをく迫
ろ前四春歌のひとつろんとをるを脈也ふむとつんをふをんれ及
對よてんを渡をくをを般ふ
をくをこくれ第ろことの第よむこのくるを脈をふをれ
うて語調もこしろくをを脈や對ろよをりてこをこの乃をしををく新
ひたまれいち紀氏乃文法
なる事をも無をさるもの也
世中よある人とうををしけさものなまいんよおをふことをみる

ものきくものにつけていひ出せるなり

人乃世にある事や業や志しげきハさる也志ゟ事業しげきさまざくの思ふことなき事あくさず其思ひを見るものにふれさくものにつけていふをいふ上にハ哥を指して外にあらえる大旨をいひこゝにハ其ゆゑよしをことわりこのゑをのこゝろえふさまなとけり歩前に世於人ゟさくくのなす業に付く其思ふんをいひ出るなりといへるハ非也抑に従ふくとこそあさ業に関わらくとえいなそこえ事業しけきものなまハこれらす心にふふこと多しそのいはふ事を見るをも此にふれてといふ也る事也

花になくうぐひすも水にすむかはづの声をきけバいきとしいけるものいづれか哥をよまざりける

こゝハ鳥虫乃物いひにいづるまでくやうに生といける物乃ときゞに感し物に觸しく發せる声ハこれ哥なるをいへり況や人としてえをこしやむことあさえず又おのれよりそ他意を用ゐるハまことに此哥にあらさる事をいのしく其本をさしておもへるか聞えたのゝ歌乃我を此ならきも自然にもとづきてこちくさきを思え志もるこゝあるをもまえいつまでの哥をよまするをもとちけませるくと書ていさとしいへるものゝ哥をよませるにハなしこれ哥をなんよみけるなと事も形く畫おのせるとも同しこの哥うた此心ハ詩にあさまする激語なるを見しるべきなからえ今河鹿（カジカ）といへり彼の声えかのうぐひすにさゝえさるをてきくに

たへこれは古より人のめぐくちやきもの也昔に山河の水底
にひそむもの此なまくは水にまむとつぶやきあへ林をむせとな
きこは素驚ともいのくを此寄の世におもしろきものをあま
きより真字序にも擇みて秋蟬を出せり林蟬と云ひならはせ
後世くゐをもしてかはると云ふ名た〳〵見今四国にすさくかへの寄何此
ぞ一きぶしあらん四季まさもはあとかはたまのちよ一里が
一ゝろは彼の通称也彼棲穀のる故ちやうても本所にくへそ住抛な
きは大やう其名を取らる中に拗をひくをひきと云ひ河にすむを
きらと云ひ或は春の雨の頃なと其上に付きくるきくおもぶをもこのち
よひろ也此後天暦の比綏宣萬蟹なと其同棲なるにつきて今云ふ
名をもおこめて河津とよまれたるより其さまのことにまされるを
後にいて専く清輔卿このたへたへ名の異名也といへたまゝしよりも世の
中おもひのこ思ひなりて実の河津を忘れたるよ
見今まても此事とおもへろは論らせる事也　さてそのかみ此諸君
子皆常かたへの語によりやすく風聲水音も皆言也といへたれたるは

ひくこゝろ數を推くまとしいけるものといふそのきかを忘れたる
也奇たこ此性情を述るのことせる非情此ゝ気もとめてうくこなり
とふたく何等のひくきの奇なるせらんおもふへしさらくこそ
當世詩も歌もあまたと尚くく奇たらくことものゝ思ひくそのさま
しらぬ人のこゝめにいたれくるとへとも実に千古の正論也おゐ
よみ人此こゝろ拗に拿てくたこ形も共に為あり感しく動く
ときた歌此寄の永しその形も乃ことゝせし其形く是るを
うたをいふ後世譜節しく謡ふのなをまとものうことゝころゑ
たるも未にはさらく本を失へるも此也もとうことゝいふそうち
うつともゆよひろく河のにむなしきの名也せるた晴になき

くあらくなく言すて志りも其こゝろをもて形く少くよこゝろ
なくれ迦羅竟嗚欲乃奈をいつもやくこれをいまこゝ阿と
ひ耶といふもうこれかなくもいまこ其文義なくといとも聽人
乃感まる事ひと一ま其奈れ志らまあも　今こゝ志らくとこふも
ふる調まいあらすおのつゝこゝろ出る奇かなく阿といひ耶とふも喜
ひの奇いよろこひ世これ奇いかなしこ他乃耳まも志この志つけま
わこのゆくを志りくく志らくといふ感歎をもたゝこゝろ志らくまあもく
理をまあらさるこゝとを悟くゝ乃ち當かたゝ乃こゝろ有なもとく
一ゐを自得すゝ　世ゝをく音調を天地まを祢せゝて古今をしらめき四海ま
わゝりて異類をすゝるこゝとの也言語を世こゝ校を華こゝ流を
ゝ乃貴綾とゝこゝく都鄙とこゝろく宜則をこゝを後人詞ま
法さてあち調をいふ本末を取ちゝこゝるものゝくたま

世遠をこゝる事ゆきさそうゝなくゝすやおの三節ゝ乃ゝ百首三
十言ゆくゝ志ゝをもゝひ今を畫ゝりをゝ添を世序乃たむも
乃ゝなゝす世道乃準繩すを是ゝかなゝを歌是ゝたゝのをゝう
ゝあゝをゝる迦其言ゝを世やすきを友ともゝ世ふゝとく其をゝ
の遠きこゝと天雲乃ゝよをゝを望むゝひゝ次なゝ諸章乃或を時
宜ゝ志ゝをゝう阿を漢文ゝ搖くゝめをゝれをゝる類ひゝあゝひを
また歴代乃諸賞ゝうゝに世道をいけるゝ世ゝ悟ゝもゝつゝをゝ
をなく後世一を乃說をなゝもゝとおゝ乃事もなゝ世諸乃外
ゝ出る事あゝを尺太前をゝとをゝをんや世章をゝゝ得くゝめち
紀氏乃前ゝ紀氏なく紀氏乃後ゝ紀氏なゝきゝとを志ゝ硬き

序

ちのうちもいまだしてこのみちをうこかす先人の教おのようをもあいまとおのもをもとこ女の事をやまとことばにたくさんのこもなくこもりふうこと形をさまてい詩とあらはれく物と感をしむる効験を挙こと是ハ詩序ハ正得失動天地感鬼神莫近於詩先王以是経夫婦成孝敬厚人倫美教化移風俗云こと、ハるよりしれこと中ハ正得失こと、なるの志ひ云ハおさまるまさに於上ハ下のこと揣摩ましもかつちうこもまひしこと、ハるよ天つちろ動く事たるやまくやえめるよりてあとそ人ハるよ鬼のこれさま

物のくやえるこれ徳化ハと遠ちろく更よめくたさた和ふこと形まるまさく何のろこんをのこを思ひをあらまるを至まてハ其ひとくの感激ハのくなのこんとれと詩ハりをやをくぶちりさものなく独ハすて独ハ志ハ一のうちちるハれを力をもまるすてとひハ又志ハのくも言也と引とりて書るものを也かの美近於詩とハるんを同一のくを詩序ハをとられくとれこうら詩ハいをを、帯ハまるこうるもおこのそこのまをおさ、る例の一家れ文法也志ハるよ天地を動一鬼神を感をしむるなとをたいたく物遠さ事ハ思ひこく何まハをこれ行まれ言ハ西ふまり神あられちなとをもまれるたりのこ引出をり

本よりも是とさるる事形のうさのこゝちんもなのく形うさん
ちをする形常よりけちうさ強あるきうんやいきる人まうく和
へきさものやうく男女のなるとやたうけ武士のんをなくもる
といつるとハ強を親しくやなすめる不人の感するハまれたち
天地鬼神の外なるうんや精誠の致まるる強しくたの物の
感動せきうん思ふへー
これ宮あめつちのひらけそうしまる代よりもつくさふ代
あまのうきさしれきうて女神を神となりたまうとをいつる方なり
さて男女といふもの候そのれ物なるに世の中始まる代より
いつくきる代をとハ人代世ー神人化

生まるる所をくハ其性情なる事あるこハ人をまいハ必方も出
来つきたるそれことうるを推察くいつる也
○注ハ天の浮橋を説古注ハ注くハ云乃こなるるこをを
きそいこ一まひうを云せこをを只方のハ天地の開者始めり時り
あをとつふとうをまうくをいつる事既るとけを諸典二神
唱剖乃事を指くいつるなるんやこの二神浮橋を立給八
しう天地のひらを始をるる代をんやよく思ふ一を海るを
まくを諸拾遺ヌ一国史開闢を初伊弉諾伊弉冉二神
共為夫婦こをとあをを尺出く余材抄を引しよをるる
其授を浮くいまくを代をとこいるいまく決定世拾遺の文

八其開闢乃初めと称せる七代の末も引及ぼしたるものなれ
ども書紀等に天地開闢の初と云ふと同じ事にて実神
代といふもんなれば書とは次なる文端をあらためて天地剖判の
初天中所生の神名曰天御中主神といふ名の中
其家初めをことごとくも出しなれば天地剖判の初を
八今乃初めにもひらけたりまたは時と云ふと語意語勢と
をこの方の世やうにて乃開闢の初に称するに只中称
つもりのもとと大やうにたんなる同じ萬葉巻二人麻呂の長歌
に天地の初の時の久堅の天河原に八百万千萬神の神
集集座而神分分の時に天照日女の命高かく天地の初

とうとのこと天照日大神なること称なるに称大よそ
なるものもつてなきを世巻十九に天地の初時従宇津賞義能八十
伴男者まで天地の遠始欲なと称あること皆神代といふ
ものにすぎざるをあめつちのひらけたりまたは時
とうまでなるに惟るに開闢の初に天地剖判の初なと
いふまで更に同じ事なるを毎世一家完人皇代演代なるを
太古をさして大よそいふるまでなるに今よりて作る開闢の方に迎
ふれば遠等等中今皇代大演代をこれおまもなく神代といふる往
こあるも推なること拘らるを以て一ひとすることとするものの
こ推く語こ言の反正に調乃後忘実なるも毎世にいふの

なりさハハとと二神夫婦と成給ひしを開闢の初と書るハもと
文乃拙きゆゑ茂後其例もなき事なるもハかくもひくるゝ
出来ぬるもあるを古語拾遺ハ勅撰なりとハいとも実ハ廣成乃造
意なるゆゑ杜撰乃私説ハ少しとも世にこハ別なる無あるもそれまこと
二神ハ大御言を詔とハいるもいとしき後世何よりくゝ然ハ
いつる書紀ハもとよりも詔とよまれすこのをいたゝき詔曰
かゝある例也されハ詔乃書法の候字書るをあしすなり書ハ
意哉遇可羨少男焉と云るを一書ハ妍哉可愛少男歟と云
一書ハ少男歟を少男乎とす又一書ハ羨哉善少男とも
意なるまのをく書まてゝ古事記ハ妍哉を阿那迩夜志

書ものをゝとゝとゝのを詔なるゝ移さゝとけたのくゝ乗るもの也をし
是をとゝハやゝくく一書乃(ナコヨヌキテヨロコハシテイタハクヨキカモクニノアルヲ)
乃海言ハ彰しを皆詔也とゝ云ひくく叶ゝ一書ハ
ゝゝ書紀古事記等なる始て記されく学ゝ也ゝ古ゝ久ゝ書ハ是
こゝ也前乃まゝなる伝ゝる始めなるゝ事を其義をとてゝあ者な
ゝゝ何ゝ乎ゝ後なる二詔を引出く学なる伝ゝる事ハ是ゝゝ
始まるとゝ云ゝゝんゝゝれゝゝなる事也又真字序なる若史春嶌之
賦花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發詠謳物皆有之自然
之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作遠干素
戔嗚尊到出雲國始有三十一字詠云くこハ拙文を模したる

者なるゆゑに素戔嗚尊より始まるとつたへたる二神の御言葉あ
つて後又神世七代和歌未だ備はらずとかいまいふ七代乃ち男女二神乃
唱言を指すべしとあるべき事まことに考へさせいふ大
御言葉旋右旋左唱後和乃事あまたあるを如何なる平
言葉にいはせるを論なくして又つねく所なるべき事
を思ひ切るべし所業しるくよむべきものあるべきなれども
同じ云ひを明らかに唱へんやいこれ論あるべきを以て学者
序として後人乃模倣すべく授けるべき事のこゝろまことに古
代のなを指す歟ひとあるべきすべからずなくして先達の無益な
ちからをもて此大御言葉をおもふに論ずるこゝろ思ひとるべき

て文意をさへ失ひまどはしたるいつわりを傍（カタ）らにさまた
ちのいはまとも世に法さとるべきことにあらずとかいふ乃ち此あめまでいたるべき
ひめなはまめ
ちさてるひめハいのめわのみこれめなりせうとの神乃ちさのたい
うりてかやくとよりえひすうなるべこまてるこれまもさてま
らすうこのやうなるをいふべきなり
あらのものつちふしくすさのみこととまをそれこりける
とよりを論ず天地のさかりめよりこのかとこのかとも論をつき成た
書ありて世に法さとりあるを下照姫素戔嗚尊乃和歌
をまきしく其さかりめ其異なりなるとこのを是ならずくも上

の文は然るべき理もの言をいつるまくそれとせず言の葉まる
はあらさるを知へしいつくさまさまとなりまさるべく然あまとも
いつるは其源たるのなれともとう巻くる諸勢すて其後よやうく
素戔嗚尊よりもおこれりとて巻さるる間迫さ又母乃御神
の呼言をさしてこのなかへ八雲立やハ天なるやれ二歌書紀の
家初よりあまは然ことわるく挙れるれを八雲の御所を天
なるの歌よりもさきなまと天上るく歌ひ地下るく詠給ひ
しそれ上下の位よりさらひくに花度乃次第よりいらせるハ文
章也さるく此文上よりに歌よる天地のひらけたるまもるとい
つる其意をまきよ文るるあるもと其このめ知るくハ言其つ

ちすしてハ言と彼上れ天地をかちうけるくいつるやうなやなき
るくるおのつのらいうきを
○注よ歌乃やうまもあるぬ事とあを也といるハ次乃文よ事
乃ムまきうこのもくらしとなるを神代の歌をおとしめるる詞
也と思ひあやまりてこのくハかるを也又天なるやのうこと書紀よ
夫曲古事記よ夫振とあるをみくえひすおとさへいるなと
論あるき事ハ詰注よいるを
ちとやるる神代まうこれをもたまこをすれかすてとめん
るもさうこのもをるる
太古ハ仏よ感ー思ふとをハ人乃開ようこ出るまるくいひ

出てるものなきいそれ文字を定まらんとい事のんいときま
へ雖し今ハたゞ然るべきなるべし當初(ソノカミ)よりを分ぬるいときかゝ
ゆ書うしとつゆ也新の古も定まらすハ章ハ長短句の多少定
まらせる也すれかゆてハゆきれまゝふしてきくろひなきをいふ
或説云上代の詩ハ文字ハ数も定まらすといふハ誤也神世の詩といふとも
五言と七云とよりたく事なし其中ハ或ハ五云を四云又ハ三云よりと
七云を六云八云よりめる事を多者也ともそれも皆ハ遠ふ世ハ節を永く
して是をこゝ余まるをい音をつめて短くうこひく皆又云七云の調なら
なへく遠ふるものなきハ三云を云六云八云をうふ歌ハ皆又云と七云
乃調也といふハ此也其ハ大ゆ又云を三を云と一七云を六云或ハ八云と者
いやりて文字ハ数定まらさるに根もして何をいうてこれをハ誤といふそも
うふ義をしもつきりて一云二云とわくへんや者ものあやとゞを云の
数とせハ只一云を七云とし一なか引たゝく三十一云まうこ五一何を三
云を結ん義と云とを一切ハ思ハ余をこをきなし只義して遠ふの詩の
名義乃概えなりと思ひ違ふよりの源
也此詩ハ奇ハ奇ハ要しき事ハ義ハ安ものまゝ文字とふ事乃ハ

しを筆しく書をいろはあゝふしへ何乃詞をかろく
用ひ事とのたへをも其をとハ文字出来く後ハ何ハとにも
こまを備く記をら故ハ其ハ多ひよりいつとなく出来し詞なる
へし文字ハう形しす詞をまく詞をかゝらを文字となをてハ者の
ろつきをの也 後の源氏物語ハを別を也とハ云とをこれとハふ文字とハ
をかすひろるおをひす なとハひなをまをこ云とふ字ハひれ
義理と云字ハのつまを云ハ云を者ハ云ともハひつ一
人乃世とかりてをきをのをハ文字ハ者ハ云ハ者ハ
を一ハよゝ者ろ
すきハをのみとハりまてるおん神乃こハこなり如をすこたまん
とていつをハくをこゝやをろをしたまふ時をそのをころをやをろ乃を

はしらをみてよこ張しるなりをやとうをかうをやへうさはまこあくやへ
うきけるそはやへうまを
詞文いふまれども同え雖しかくては人乃世となりて後すき
乃やはそ言とふ人有くそは人今のこ十一言はこのいよこ始め
言ちとふの外やへきやうなりさくあるすきあやの尊よ
りそのの句すくるよりあるこのはるはは文なるつの数言をた
さこそ又きはそはその言より世と同しことをつゝまなるす張も
こうよりへ乃まかくきてくこれろ絲の御あるあきくやさまを
は一句文やく衍文也詞すきはその言より十言を除まて人乃
世となりてそみうをしゝ餘りは一ゆしいよこ乃るとつゝ考くみまた

いとよく同えく重復はこはりをく文乃はらを拙のらさるは
さて其意ハ詞たとの乃こ一奇より始りを起りく世を傳まつりさ
まとも其神代の詞たは大のこハ文字を定まりす事はこを
つきかつきを人乃世となりく後るそゆいつ三十一言を定
めて今はこ心得やすきこ奇きよりこ乃ふとハ一はさるハ八雲の詠も
天なりや乃詞をも言はこをもこをしてすれかはして事はを
つきき雖しといつる中まうちこあくる文章は三十一言は詞神代
ゆをきれたちハ雲は詠をたゝめまれくなきまハあるゆとさる
うこを宣まるまる後るらゆたなかを文字を定まりすといつる
中まハ八雲は又雖歌乃詞人の世となりて多このうさるまあ

ら孫と方のそい三十一言よりあるなまい今は其大原をとりけて
人乃世となりてそみそをしーあまるを言と云ふ人乃世とあ
ろい神代なむうひろくいつろふく只後世といたんうめー然るを後人
誤りまくく思てくく上なすを其の尊よりて起りけりといつろを
八重垣乃神詠まくく其詠まきしく三十一言なまい拙御歌は
事作きくくろ人世せる三十一言はいよみなるひろといつろ文意
せとそんろせまとを千早ふる神代なる端を設めくまを其
文上章と語脉をるまて其意は聞えさるよりを再ひすを
を其尊より乃一句を加へくさる意を技名ふしーろなるくー二章
別段なるを一切なる思ひて強く文理を造るふしーろよりつひ

ふのく聞えぬ事といなまをろを　蹴ーを尊よりを十なる雷文字をひき
ありて世となりてをを十ふおきるよ
乃文字ををくく人の世となりてを素戔嗚の尊よりを乃みそを
ーを乃を言とやうを技名乃なせを只世一節の文意をいせをを通るーき
ふ以くり其意いいまを乃世となりてを素戔嗚乃尊よりおこをーー三十も
ーを乃を一文字は受伝くよみ名をを更を拙序の鉢裁をを、あくを
すを乃くを世意をくりとをきたるを乃を所くをのを雷文字乃所くをのをを女を
きすーを文乃一辨也なを言
いよく海すをたらをを　梅ろを真字序を遠年素戔嗚尊
到出雲國姫有三十一字詠をあるよりて世をひを出来るを
世真字序は下照姫の長歌をあをを後なる豊玉姫乃赤豚の短
ふのを取くを彼三十一言を統を志ーたる意をれを文義大を
異をを其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者とを
ろを是也世真字序を同ーく世文を意得あやまちく志ろ書を

せるゝ又次なる歳ゝ山の歌を冒れと門の奇なるこゝ侍るを
思へハわきと改めれーたるまやさハいつまるもあま今と濕をへま
よりすさるゝも毋へまを今ハ此真字序を読として強て其字
を引事ー学るもの迷をとよりを此神詠を短冊ハ此の祖なるす
ゝるゝく歌とふ冊ハ權興也さるをたまくこ三十一言あまハ雖
然ハ他是よりを記るゝ〻ゝんも又こふまき事なれハさるをひ
ゝ云をとつまハ侍るを此序の文意を知きていさるを結るすゝ
つふるこ

○泊る素戔嗚尊を云ゝ此泊ハ下照姫乃と同義なまハと
照のすを此との言よりを記ゝるとふ下ゝ是有ゝさをこて

ハ也書ゝるハ彼両照を一章を見ハ侍ゝる故也顕照乃本ハ
すれをも尊よりそおこるを名の所ハ名を天ゝるおゝん神の
出れをこなを云ハるいこ〻き譬ハ諸泊を無をるこのめーさくやゝを
ゝる乃夜をやへ橘やゝか葵を本との夜と同ーく其數多きを以
て多ゝ此をゝ也も出る雲と書をゝ〻ゝ〻ゝ乃ーゝる出を此枕詞也
と云ハをこ乃夜を伊の歳語をゝをゝく伊夜をもふいやまーいや弥
ーのめーいやと略ーゝくやゝと也と思ゝるを本ゝこのをさて出
雲八重垣を出雲此宮乃八重垣とゝを也ゝ調をまのをゝく約めたる
ゝて出雲の宮造也とゝをんを同ー後ゝを津を此海を乃網引
を津ゝるひきれうけ乃結のゝく小船のゝるかゝを云ゝゝ小船の

とも相応ずるとさへいふる類ひ挙ずるに人も皆風調と出るとー
てきこの詠きをとることはらさる事乃序の格也八重垣い宮殿の結
構をほめることへるふる大宮と九重といふる同ーく千木高ちり
なとゝいんなひとゝき意をへ也さて其宮造也い斉稲田姫をこ
め置くすこたまひん料なまい妻籠る八重垣造りといふ事を
得く屋を造乃い古今の通俗也再ひその八重垣とと折りへをい歌
歌のならひまく自然の事の結句也壹文字い其事をつゝむ
乃古代常語すて後る重ねてもかつく用ふるふを也さて
ゆくい説なすとのく今よまんする歌るゆくさまるおうきぬる
乃ことすて其奥趣いなきうぬくよむつきるるい是も事のん

るさ雅しといふ中まを志ひらく歌こあるるの也実る意をへを
ふをはもうまくい意得ることおあを天なるやのこの之見るか
なーさくくこれ異説もつてるるなを也又歌る八雲といるる付
くハ色のさなといろい例乃論すにくこれさくゆをれる
といふ事元兼とこれぬとも也古事記る自其地雲立騰とあ
るを也所るよるてのの一説ある〳〵思ひ書紀るいをれさこな
ー出をいハ國名ハ雲〳〵ふい其枕詞なを也ハ実乃をれてさん事
おるるれ子又まとの雲る向ハていかくいよを出られぬ事也
実景乃ことを海と序歌の調と更る選をへきものるあら
す風土記る出雲の國名是よを起ると云も推ひくの説る

てとり雖さいたれあり世俗年文まつりて委くこれを安
をすまして書紀古事記の歌は序文は其歌をさそて敢ひて
るを少うすみいまは盡くを信しうこと事別を論ぜり
かくてうの花をめて名をうらやこかすをあいれこ霧をうかむむこころ
こと系おかくを演くこなどなりふる
示くてそは人の世となりてそ云こをうりてふやこの世と移り
てよりかは事わさ志ひくなるゆさてかく萬ひの言は義く
好まうとふ是こを歌端やまと歌いとふより出さる也とふ
まての大負をこにくを注考文を是めてうらやこのはれこれ
しむなとふも畢竟を皆感すの事と志ふ一四季のつうる

をあくすをこまのをせうらめてたさを
さるおをもいてうあもとよりはまをてと一月をわうをた
うをさ山をふのもりひちよりなりてあまをこれひくまてお
ひろかをまうこくふこれうこもかくはとく形ふ一
六を神代より歌のさをこれ起りて世古今の詩をてよひろ
こうを行をうを論ふを樂天座右の銘を千里始足下高山起微
藝者道亦如此行之貴旨新とふ文をもく書とをこりされと
千里云こを年月をわうりは一句をくをて神代より今を事を
ろとわりをこのれ言山云こを天をこうれ引まくの一句をそて
漸を成遂ろ類をこをせうなと例の我物をて畫成ろあ

世ちりひちりなりていちりやひちやはやもろかまる世ち
ま い 埃（ホコリ）を こひ ゑちい 塵（チリ）を ふきく 世文過去を 指 なのう 裏 ま 未
来を 合 ゆく 後 を 祝 ふ ふ ゆ く なる〳〵と いろ 言 ま 受 ゆ ろ め て
こ ま 延 なる〳〵と ゆ る〳〵て 後 来 も 慕 ろ い 上 文 の 事 ろ 心 ま お
ゆ さ ろ も 書 〳〵 と 今 ま つ き て 神 代 も た ろ も た ろ と 同 一 心 も
〳〵 て 再 ひ と わ る 〳〵 き 詠 ま を ひ と〳〵 す て 同 す ろ 格 也 後 の 文 ま な
ま を 形 る 〳〵 け る を ひ ろ ま な と わ を と お か め き て 書 な す 類 ひ ま
あ ら ま る 事 い 上 ま 世 歌 を と い ひ 神 代 ま ろ と あ ろ を う け る 言 い
〳〵 を 味 ひ て 知 〳〵
な ま つ ろ ろ こ も み の と 代 お ろ ん ち 〳〵 先 代 也

おかれさこきのみこと代なるいつまくに人ときこえ給ふ時東宮をこの人ま
ゆつりて今わかつきたまたて三年まなりま給いま仁といふひとの
ふ ろ も 思 ひ て よ ま て 奉 も 給 ろ 也 こ の 花 い う 先 の 花 を ち れ ろ 〳〵
こ こ を と を う け く 何 ろ う も し 道 の ゆ き ま ま ま る 事 実 を 述
き り や ま て 嬰 児 の 手 な ま ま も 歌 ま あ 〳〵 す や と ふ 言 ま 也 な
ま ま ろ の 言 い 難 波 津 ま 咲 や こ ま 花 冬 ま ゆ り 今 い 春 〳〵 と 咲 や こ
ろ 花 也 言 也 帝 の 御 代 ち 〳〵 め と い ま ろ 〳〵 ま 大 御 代 の 初 め を 祝 ひ
奉 も し 歌 ま り と の 言 也 聞 く て い ま く 言 ま ま と な て く 也
ま 雅 也 ち も ま ろ る 事 な ま い 只 そ の 端（ハシ）緒 を あ ら て 来 女 の こ く
と い ろ ま 句 を な ま 〳〵 文 を な ま ろ ま こ ま れ い 来 女 の 歳 ま ま り た

みくとゝ山ゐるを同しく忘れさるものを故又此二句ハ後人の言
なまりをせるを妄説多く雜をすハ是こゝうす先ゝ言ハ春まち
出く諸木の花ハ咲ときゝるを御代の初めハ緩ひを惟ゝ人てゝ
春ハ折返して咲や木花と說ゐる天の下ハ弥栄えるさてのえ
ほこれるさまみゐちして今ハも愛ゐるき說也仁德紀ゐ春正
月御位ゐ即ち日ひとあまハ其春ハ言也とゝゐゝさなまとゝ然
ら考ゐゐ御即位有く四年二月乃詔ゐ今朕陰德兆於茲
三年頌音不聚炊煙轉疎即知五穀不登百姓窮也也
云く同年二月の詔ゐ自今之後至于三載悉除課役息百
姓也若云ゝ又七年四月天皇居臺上而遠覽之烟氣多起

是日語臣伯曰朕既富矣豈有飢乎云ゝ又十年十月甫
科課役以構造宮室於是百姓之不願而扶老携幼運材負
簀不問晝夜竭力爭作是以未經幾時而宮室悉成故於
今稱聖帝也これよりて見ハ此說よみ一ハ七年より十年
まくの間ゐ有ハ一四五年まくハ天下貧窮なりしかハさりも
栄えゐる世ゐ何ゐ調ゐ出ゐ為ゐ統御八十七年ゐ久しき
ゐ七八年のうちハ御代乃初めといたん事ゐとゝゐ也
○泊ゐ東宮をたゐひゐ云ゝ武乃ゐ天ゐの誘ゐのり思ひしく論
し奉ゐしゐハ此ゐ事ゐ泊ゐ解ゐゐ如し又ゐ仁ゐよめりとす
ゐ事ゐ行ゐの書ゐ見ゐゐ事なゐゐハゐと覺束なゝこそ

推まてもまれん海とるゝたさこゝの尊をすゝめて御位をつけさ
まとゝいふすゝ當世の鉅儒賢才乃名あゝくこの兜道はみこの
師とゝ申しまに仁をさとゝ奉らん事いともつさくゝ侍ゝ然も
附會者なるへゝ太子薨ゝ申して讓る所なく御即位ませゝ
ハ尚然の理まて自然の事也何そ他乃すゝめをまち給たんさ
ゝ世說を論て申く徳論せゝものゝとりなきゝハ次ある六義の
はゝめの風を配ゝるとゝて詩をよゝ風刺するとある意をゝよゝ
きゝる也次ゝ古ゝ二說ハ言のちゝはゝとあるとゝれハ撰者もま
仁ゝよあまゝとゝいふゝ古ゝゝくゝよりて難波津を男說とゝきゝれ
なるまゝあゝんさまゝとゝふゝゝり思ひてよめりゝとゝいふ方ゝハも

とゝよりとゝれさる事御つのおかん始也とゝいふ佐湖ゝ古ゝゝ後
なる奥義抄ゝすゝ位ゝ即ゝ也ゝ申ゝ新羅乃ゝ仁ゝ奉ゝ言也
とゝいひてすゝめ奉まゝ說とゝれさるゝやさハ拔ひのゝ言ハ言の
おゝてゝ明ゝゝめてまゝふゝきすちなゝまゝ也又除枝ゝ難ゝ
て云應神紀云四年春正月辛丑朔甲子立兜道稚郎子
為嗣云云ゝ申ゝまゝい兜道乃皇子太子ゝ立ゝ也ゝ事ハ給なゝ應
神天皇崩御の後御位ゝ即ゝ也ゝ申ゝ事をこゝろ也ゝゆゝゝを
給ひつゝまゝ又兜道の皇子ゝ御事をゝまゝすゝくたゝひゝ讓ゝと
いゝゝも覺束なゝとゝいふゝ也ゝゝ迦ゝゝ伊勢ゝ須賀直見ゝ東
宮とゝのゝ文字ハゝゝ誤なりとゝして東宮ゝ立ゝ讓ゝて也ゝよ

之解しるハ実よりもてい寒ゆ張也さくハ花ゆ咲うこのまく更ま疑ふ
まちれしこの花いうめの花ゑ是も冬こも是ハ春をおこすの
枕詞なるを無き冬とまき花の咲出とやうよんすく梅
なるへしと思ひとれるめ也うす梅をのこさるるハあらす
あさう山ハとの業いう孫めるたいまよりよみく
うつくまのおかきをみちハおく〳〵ハいしうるけま國のつきこをか
ろそなりとてまうけなとしたまれとすきまいかまるまいう孫め
なりけ女ハそうけとりてよめる也これるをおかまハ心とけるる
ものさう山の言ハいとハ萬葉巻十六ま安積香山歌副所見山井
之淺心乎吾念莫國とある言也右歌乃傳云葛城王遣于陸

奥國之時國司祗承緩怠異甚於時王意不悅怒色顔面雖設
飲饌不肯宴樂於是有采女風流娘子左手捧觴右手持
水擊之王驚而詠其歌乃王意解悅樂飲終日とあるそ
詠と傳と併て考るま葛城王其國司祗承なれすつくなめ
おるまひるを怒くさう設ふれとも樂ますいと不興なるれ
ハ更まあつうひまひくを前の采女ハ風流なるを有ふを其宴席ま
出して面へしうひまてなを也さるを也こい歌の也縁あまいうみても
此宴會まとひしうも有ぬ一さくく其うねめ盃をすとて
此あさの山を詠ひつこいと迫くさしよるて膳をとおくなるめ
きうる也或説ま左右の手ハ盃をきなるまいつまの手まて膳をいうたん
おかつうを雖一ハ偏うまつさなるそうる盃のさしおの

まさらんやと　さて歌乃意ハ我心君ニ淺からんやはとかれつゝくも思ひよ
せ給ふすなとけさうひらを戯まりよみくと云る也いにしへ
序前ニも山乃井のハ淺きといはん為也また安積香山とおもて
るハこの宴會のの山井をもなとかくやうて其所をさせるなら
ん宮城郡を國府ニ定められしハ其後乃事なるへし當山の井
といへるハ只をと掘たる井ニもあらて山川の流をいさゝかせきて
よどめ湛へたる也其澤まる水をゐといひ其かまへたる構をゐせき
といふなるは居（井）乃意ニて今も流ぬ水を居水といふ歌さへハ
同十三巻の長歌ニ天雲之影寒所見隠来矣長谷之河者（アマクモノカケサヘミユルコモリクノハツセノカハハ）
云くといふ歎ひまて上ミて安積香山乃歌此三ゆる事なく其

形容をいふ也さらく淺きことをいはんためニ山の井とおきて歌さへ
みゆるとかへる心詞なつかしく姿もうるはしきものゝさらく
うるも此意是ニ解て宴楽ひらにあすニ及へきといふ事とか
ろろらきんをなくさめまて又さる盛情ハ専ら本乃白の
志ニあり此歌よ也淺きとあるニ只ハ安里ニ山の井を用ひ
くかれ此調をいへる後世の人を捨らくこととよみたる古文
のことやらをみるへき也又世ニ此あるの山の末を淺くハ人を思ふを
たゝのみと思へたり六帖好忠集大和物語なとにものあまたハ
既ニ此八歌もて彼ニ当また方をや傳へたんさて此奇
とかく思へたるといふなと考るに此戯と歌を諫免の方と思

ひとりよりおこりし淺はかなる心を君おもひはなくまと有ては諫
めたる方にはいとも似たる風さへ見えもすれば淺くは人を思ふものにはと
して自他をも思ひ入ぬ門調をつよめたるなりさらに其意はいふて柔
かには志の淺ましく思ひ輕めおもはせん質直なるの都く誅する
けるにこゆるなきまれと云ふ彼あつま人乃不肖なる方に枝のおし
る風さまのまにまにしたらん意なからめと難志には聞と見難したと
ひ然聞ゆともかくもきこすく諷る理りを立てく事となんにはあら
く許ふ方こそはあらぬ其怨なきむつきその事らんや文志の實
をもちて諫めたらん言の葉をいはく誹まりよりとめりといふ
つき諸説此を持勝をおもを誹まり也と思へるはたゝの事よしや此を

持勝をおもともさはらり正しく諫めたるを誹まりとはいはひなりしこそ
其歌乃意は誹まりたるをいへる事上に解るがごとしやうやく本文に
常に衛初め世家女の誹まりよりもこそと云るは二歌の意を解
釋しるる也其形状をいふるならんやかの主文而譎諫言之
者無罪聞之者足以戒なとといへるをうらやこゝろく其徳をそのくせ
んのんよりこれはいと淺からぬさる効驗乃有へき奇とも思ひな
されとはかく感へる詞も出る也よく真情を推しみるへし陸奥に
多此をもこゝ形き所にて宮乃内に流之馴る風流女の立ま
るなに有を思ましなかなる歌よみ出さらんには誰の人かは折解て
興にいらすやは有へき其用に只一時の怒を流さするにあるのみの外に

理なりと責るく誣る事なるまこと詩の關雎麟趾之化を者之風鵲巢騶虞之德諸侯之風也なと書る類ひとそて唯御世代初めを祝ひ歳毎を怨をなこめるるもとも代事ハ何もあ一す歌の父母也
といたんなハ波關雎騶虞ハ此のさの德化なくてハと思ふるよりも大
雀尊を皇位をすめ葛城王と諷諫せるれと牽強附會の說と
なりてこの代詩序なき歌ハるとの也さるハ詩情をも深く本よりも
奇たるを形くたるれきの本意なる事をも知さるものなりて中
ニ此集乃罪人といふへし然るを新撰和歌集を上に風化下に以諷
刺上雅誠俗文於綺靡之下然復取義於教誡之中者也とハ
るハふとふを凡古人の漢文を書るものハ形さの文例勿法を如

らまれく其意をハくこの一ろ事少ろ代今も大ろく詩序乃まく
を書うつさまくるるてかくハ一れ返所多くやうく此序を真
仮を述られるとハ事乃さま同ろ代ろ一法のうよまれ一ろ
說代心を違ハるものを也とよりも歌をもくを風化ー上を諷
刺者事なとをきくあき事也志のふやら國をさるを例を
いとく同志ぬこもやるやや風化諷刺をもて詩序の德をのさ
るハなるく形る事也よりやさる事たまくなるもおまるを言
を然るものを也とハふへうす又これ新撰とふものの今乃なハものら
ニ紀氏乃ろひ玉ハるまとこのこを別を論あるをされを
其序文をおさくを也なを疑ひあまるるるすさハとまれ大を

皇國人の書るゆゑに假字書あらんにそれを實と一照しく真
字書をも取捨をへ一志すべく事實をこのるゆゑ多くさるハ
已ら言語と文字とをうへとをとをもゆゑ詞ゆゑ
ゆゑ詞しくゆゑこそるゆゑ大なる事こそあれ細やかなる
ふしまくこハさる方を溝をゆゑ其似すべく思ふゆゑ事ゆゑ此出るまこと
すべく事ゆゑ上達へるゆゑ況や歌さへゆゑ
我大和言葉叶ふへき謂もなきことゆゑ也と考へ　さてく萬葉乃傳文
いさら歌よりたらん時の形容や後よりゆゑ思ひやるべく書るゆゑ也
水と持とあるハ山ゆゑ井ゆゑ唯へる意とふ説あるとふるこゝろ
こゝ水と酒乃字の寫誤ゆゑ也ゆゑ又はらく文勢をなる
此傳書一人を諫除乃歌とせるそあらん覺束なゆゑ
萬葉中の詞書を愛雅さ事乃こゝ多ゆゑ也ゆゑ此十六乃

巻ハ其歌乃趣意を違へるゆゑ大抵ゆゑ傳とふゆゑ類
ひ一ゆゑ中ハ世人のうけふをよすゆゑ真實ハ違へ事
多ゆゑ都べく實事のうへハ有あるゆゑ書しを
交へ一只耳ゆゑ思ひ外すゆゑ如當なるゆゑ
ゆゑ遠くゆゑ仲丸乃天原振さけるまこと第別乃所と
し迎へ道灌ゆゑとゆゑ命の惜らゆゑ辭世ゆゑ歌とす
ゆゑ實ゆゑ其こと事ゆゑ更ゆゑ有事ゆゑ事なるゆゑ大よそ
なる所ゆゑ誰ゆゑ誰ゆゑ同ゆゑ相ゆゑ世ゆゑ
く成ゆゑ深く心ゆゑ用ゆゑ有へゆゑ文たゆゑ
よりよりゆゑ此ゆゑ歌ゆゑ詞ゆゑ

しかはせてをしまるる意あるをもしも大井行幸の序まも
なきを我君乃御代長月乃九日と聞日ふるく殘まる菊こそいん
ぬる古佐日記まを著せ人を思ひいるくの川乃とさうわまるくま
こ海神まおちくとふひるく何のあうけまるつりてほやの
はまのいすゝをなとあるをまをふひるく思ひ出ておちくとふ
ひてなとあて文字乱回一格迎次まを法くい山乃樒よを
をおりくおたゝまして云くふをもをおこゝのふとて云く
はくこの菊とて云くなとたくみくひひとんを鎮火祭の文まを吾
平見阿波多志給比津止申給豆吾名姫能命波工津國
平所知食倍志吾波下津國平所知年止申豆石隠給豆

占美津（ヨミツ）牧坂（ヒラサカ）に（イタリマシテ）坐豆云くなとの數羣ろまこれらをを
まこひすくたろのれとのこりるハ古語まふをを要ふハ外まを
無をを

○泊まを蓬城乃をを云くまを萬葉の傳文れまをうつゝこ
ろものなをハ論なたくを乃の歌をを文を振ひるく歌をと
はこを書ろの傳とうをれるはこ
あれをこうこを歌のちくはくれやうをくそを形ふを文乃をを先
ふをゝける
御代乃盛を木の花れ匂ひまを岡まを大君れ恐を山乃井の
歌と流まをくをも夢こをこ二歌なまを片をまを初めをを

ひろく人ことを習はせ難波津を男歌安積香山を女歌あらば故
は習ふるなりけるを父母はやうやうにこれをせるあら
ゆる歌といふ事乃父母なりと思ひるを非也さらく歌は父母と
ひを習ふ人のたらめふをなといろ何とをくたちやすくを同
えさく今い歌乃ひのまもくに教えひくろ世中乃さまおりひやうを
なら文乃妙也さらく今の世は伊呂波を同しき物なまいたく
難波津の字安積香山の云は業とのこひ泊るを歌を筆を
るいろうのき賤を世を志るあるを人なるまたを
志をこる事なまたなきをよりとすとあまとそれをいまね
く志まるもく奇を出すすくを泊志る事を無用也又出雲八重垣の
神詠をなわあまねく志まる事なまと出やるやと云るい非也或泊り
志さふ〳〵今は世の伊呂波とこふを色い匂へと教ゆを我世雅を常なるん

作枝を云或泊を安積香山の字を人はあまねく

云は初めを摘く云ふるく今と同意也志るを伊呂波とあこいたんをこうすと
して全くこなへたかこかそこのひぬ〳〵今を推く古乃歌を知〳〵八重垣乃
神詠と同類ないるを常ぬとを也又泊する事も無用也といへるをいこうより字
を出さすともあさり山のとは第とあるんを其意を泊志はをへりすす
そをくうこれをまむ川なるをやうは歌をやくろいるこさ
我もくを更を文縁を起しいふ時とるあるをて置詞をく
それをうまなれとも我をいそれすてなといふ意乃前さ
約まりく出るろ語をれをかくはとくいつを中間をおく例也
抑の字をあくるを其意をろるをたるをあり後世費增を
あは語をおくいとわをなをさて歌乃をまをいつなとふるく其
ふをるるん事は縁く有すをかくいをれるはかは當也
ゆくをやすやろ歌をを六義あるれといのやくいひ立てや

また歌の言痛(コチタ)くなるを厭めしきかくはおとしめく取あるを習俗なるを下は憤まるより彼らかこりて貴(タト)しとする所を奪ひて
みすくわのものとして世を去めたる迹さるを志らく勢ひ
をおしくたたかもまくく事竟たゆる癖るたたわきとふ
一和歌をとりあるをいふこの師あをい磨乃待なくみもかる
事是一とまさしく彼六義を標めなすのう都さ志らする
を淺ましたる文也 雲一た和氣氏乃醫は丹波家を四ひらくいたんを我大内
國の産物を人参とふ良藥あをそこは專ら業む
居山みとりも世相なき事ならとおるかゝ丹家さて如何い若んや
こをを用こんいおそかをし今は文勢若意是をひとりきあの世後世さ一
時乃意を惜らすして是を千載の模範とそうをむるきをたをのさ
勢ひ有る思ひなせるい歌くい一首も今を機を陪く時を数ふる後乃
弊をこのいや みるをいとまれきを如何をせんまを動を奉しく撰勤せし
世集乃序なれをかこみてをうしこをはくしをもつくしむ(つ)くるを しの私

さまをたをれをほしきまくなるうん事よをいうしと思をんを紀氏の紀氏
なるを志らさる迹こを世撰集乃一業をよりそ撰年の高績を乃へらを
うるものをく後世文章を志とくしてみうををとをかめ下をてうひ名望
利達ををうる数ひをあらすさまい次すを古の事をも歌乃心なを志まる
人後を一人二人世をとをひく傳出乃人をを心世まくを寡聚をうを
と尋常勅撰の序世辭なうんや歌世外乃人々其名同ゆ世へを生るか
つらのをひ云乃こを林を志乃をさ本義のをくに多れを歌とあをおりひく
其をまをしうをなるへなとをいをれうをは中をいうなる雅うたををうん
歌仙乃中を官位をこうをさ又をい嘗をいをすとをいうをい志いうくを世撰輝を
して實を當今をたをふをいき人ある事なるれをさる高きあをこをを世へを
このつうをかけをれまをす志乃をき本業世数を入魂一其外を今世世中を
つき人乃心花を成を久乃ををあを歌乃家をうをれき云乃をいをくを世を
や書乃何をこの撰を何ををいを世を成をそしを世を只道を
興世世一世をを乃を曲世乃家乃窺ひしをさうひをあらす其あをるをや鄙るや
晩脇として影をとるを似をくやをう歩つ者なうねを今意詩文を作くを
いへをも今意詩文を書を世るを如一志くをおいを文人學士をむうふを端
をく逐んを拙なるれい天下醉を似を千載乃今を其真を知人なーさ
ハ人世実因をあををを志をいい是ををを世やうく貴き
いやしさ言のをまをしを世ををを乃花世あをを月の夜をををくあを
をを成を已乃志く歌ひ撰ひ初をふを世を歌をあををを事をなれをい

ひとゝなる古集乃いさを作くゝ遠まうのひろく後撰拾遺の撰あり
後撰せくゝこまゝ倣ひろくゝ歌より始一集ゝ及ひ学ゝ以ゝ学ゝ沙ゝ学ゝ事も以
古集用基乃底蔭ゝよりのゝ鑾ゝ異紐乃鴻業隆んなる時ハ子孫自
然ゝ相後ゝく業ゆゝめゝ龍乃頭あゝ金耳然ゝもゝく動くゝ其歌な
き時ハ蛇尾何ゝ
つゝむとゝ云ハゝ　さゝく次くゝ以ゝ六ゝさすゝく當ゝ面事也詩の
六義すゝ世儒異論あゝて乃ゝた意潜ゝさゝものなゝ
是ゝ歌ゝ云ゝくゝうまゝく當ゝ面紀氏もよくゝ云ゝれゝる事ゝ
迚世詩ゝ競ひゝく三式ハ撰あり四病八階なゝ立ゝ事ゝ其例
ゝわゝゝ云ゝくゝ布ゝ
又其六義の実なゝゝ暗ゝあゝふゝせゝるゝあゝて去ハ少ゝゝて少ゝ
けゝ一家の文法すゝてほゝんゝ謎語ゝ似ゝく其ゝゝむ人ゝゝ自悟
せん事ゝ待ゝめゝ世ゝおゝろゝうゝこゝたゝくゝゝやゝまゝ事ゝ形ゝ事ゝ

歌をなんよめるゝたゝひ言をつゝハしけるなどやう有へきなを考へくさる事
有事なゝしゝ其心ハ其歌ゝ又て明らゝる事ハ志ゝことわるを及ちす
とゝいたく何を又其心をつゝまとくまゝん又何を歌
其名称と呼ふへき更ゝ也其節なきさとも　中ゝ也このそへうゝ
とゝふ歌有へうもあらすこそ分乃街道ゝ一よゝ也十まて
なゝらへ風ふをかそへ歌とゝ云ゝ類ひ乃何を名称あゝ一なゝ
へゝをとよゝ也唐乃歌ゝを加くゝう有へきなとあそれゝるゝ
乃名目もうきたゝんをた推ちゝ風へきゝ也是をゝをゝうさ
義理ある事ゝ思ひゝく先西さまゝく論あゝ也と水乃月ををさ
むゝゝひとゝくいゝあゝく丸ゝをくいゝあゝくゝ乃ゝをゝちゝるゝめゝこい
他者ゝ意を得さゝのゝなゝらゝを文様の調ゝうとゝさゝのゆゝを也
然ハあゝを強く配當（オシアテ）ゝうんゝをかゝゝこゝ六義乃説ゝ以つゝ

りさとゝふへきなれを風ゝそへ歌をあゝく風論まゝるやゝう也意ゝ
とゝるゝなとゝつきゝくゝを猶ゆゝのゝを行ゝくゝゝをゝたゝるゝをゝ也
我のむゝくゝさゝ也ひとゝ以ゝをゝたゝうへうゝおゝかゝさゝゝあゝ也みゝゝをゝそへゝさゝく
まゝまゝるゝうゝ

なゝふゝを以ゝをゝくゝやゝこゝ也ゝをゝれゝあゝゆゝこゝあゝを
とゝをゝたゝるゝへゝとゝをゝさゝゝくゝやゝおゝのゝをゝれゝとゝゝふゝるゝなゝるゝへゝ

改六ゝをゝ也歌ハ荷田春満ゝ古淳ゝを著ゝ又推ゝて一人の淳也
とゝゝゝるゝハゝをゝるゝへゝをゝこゝと也按ゝるゝをゝゝとゝハ必歌細字ゝを書ゝゝゝちゝんゝを
淳乃雅淳ゝを分ゝゝゝとゝゝゝいゝをゝゝゝゝ大字ゝを書ゝゝゝゝゝ紙をゝゝく奉
文ゝ也以ゝをゝなゝを也ゝなゝるゝへゝゝ中文ゝを一冊ゝをハゝをゝ歌二つゝを共

そへ歌三門にハいふことく幾首つらぬ舊説にハ是等の歌や是
こゝにハ叶ふらんとやたゞ紀氏乃書るなりといへれと数首乃
哥を序文の中に書るゆへんもいかゞあるらへおぼつかなきを讀つゞ
続くハ前後の文勢にて乱まじく調へ通して又史めく撰者
乃書きたるにもあらすとよめり式六帖も一時乃所目ならし
て其實なき事無きかの如し歌などあつかふ事尤撰者の
意にあらねど大さるかれ此みのとゝいふより歌ひけらくとも
捨へきもの也 難波津乃歌此意を花に譬可の如く帝をそへたるにハあらす大御代を祝へるなり今ハ木花を咲花とさしくの方にとてみのとをそへるとせるなりしハ是も古注の如くいふをおもひくよめりと見ゆらんなれともよりしていふにたらす
かくいふにそ加へらく

さくら花におもひつく身乃いちき花さ
みにいそつき此いろも志らすくとふるなるへし
これも常ことにひてともにたとへなともせぬものあしこれうさい
かにふるものあらんそ此ゆゑにしいはくにたくことゝふるな
んこれにハかなふへき
此歌も拾遺集物名に法なをかくしてやうく其鶴かよを
よめる黒主此字也餘材抄に勞此身に入といふをいてつきの矢
の身にのと散へく鶴の花に戯れをなまく文の續ひをく射
るをも志らぬいちきめきる事をよめるかとふるそ然るへき
又同し他者の哉んあやしくいろに春をまた花につく身という

て成名と同しけたかをよみ人しらす歌と為しるく八雲を是を人
乃花ようれうを云々の説を思へと人乃花をめてんなるかしす
てこつきこのまくあちさ所ともつへきなるへき事乃さまかし
はさるうへはさて八矢よりもてる物もなきを勢りとよりそてこつま
の矢を似つゝ川乃を除桟と和名集と平題蓋楊雄方言云鏃
不鋭者謂之平題和名以太賀波 郭璞曰題猶頭也こつきれ矢さまハ
まろかす板と小島かとに疑をつきすしてとうんとて八今も是と
射る事也とやすと云り按るに志ゝ疑川々と労ちりて物を
きハ其矢をてるさとつふ成しあちきかきハ今を俗と云そ
よく曲まるかひなきふたつのかきをかるゝ意をとを此毋

頼茂と文字乃上と濁むへしうしくさく是をかをへ歌とあるくるる
ハ法ふくとつきもるる語調なきをあるへし茅と云りゝ如く
ゆをへ歌なりつふをきるつるく六義とはつりてるあふ和見を華
るなれハをとより的者をへあるあらす
○頭注つゝとハたことを歌と云取と云今注云詩花歌者平題
感称也然者此注不可云貫之他仍有注注之古本不可云貫
之自筆歌或人云公任卿之注也云く注義宣歌とあるをそるハし
六義の歌を雖したる古注を公任卿也と云る或注と頭取も
同意せられるを其文意其文辞を按るに尤然るへくなか
ゆをるハ自除乃古注を云れ同卿なるへしるに除桟と公

任卿也とゝ人とも志らす頭脳抜ヨ公任注とて引まゝ云ハ別
ヨ真字也志うれい只天暦のころより後の或人の注と意得へ
しとゝ人ちも非也其公任卿也とゝふ注もやうて頭注ヨあゝす
や別ヨ真字乃注あまとて又仮字の書入ともなとうせうまゝ
さらんすれとも真字乃注を古注と同意なるとゝもて同卿な
るとゝ知へしそれも頭脳も表やうとも用ひらまゝうまさらく此注ヨ
是いたゝ言ヨ乃ひてあるゝとゝなともせあれの也とハ是をまさゝ
く六義乃賦也とゝんてうる也雅和ヨ敷布其義猶之賦なとあ
ちヨうれへんとすまとゝたゝ敷布せさうん云ハまくなるまた
取分く是と定めんヨよりなく文体なきの仮うかさより次

あろたくことゝ云のを引よせうらの也されとかそ乃ゝとたくことく仮
そ一ハなうんれてそこと歌乃所ヨハ
うれヨハなすゝうう
きみなけきあゝそれ歌のおもてくれい
これ乃きさとにきてゝやはてうんとハうなるゝ
おまい相ヨもなすゝうくそれうやうなんあるとやうヨふなりこの
言よくれへやとも尺ゝ是ヨ者ちめれかやあうふあまこうりいふ
さくもはうるいもヨあゝすくうやうなるやこまヨたうなふへうん
君ヨけきた紀氏乃自筆と云伝て難波人遠里何かゝうを
くう古本あまてそれヨハ君乃けきとゝ行ヨ是うゝしかる面

き君にと何のた鮮かにしけさしも君が起けるまゝくいかにはい
かに戀しくも承つひくに身を消んすらんと也あしこれ歌ハ
只おもひそと云ん枕にかゝりて其霜に准らへたるなり母ハ此歌
こゝに叶たる承事論なし

○泊に是を物にも准らへるといふも文字ハ後に選入しこ
ろなるへし物にもといへる下のてに文字おのつから漏たりて怨
ち准らへぬ事となるハ語調乃定まれる格也今も物に准らへ
といふなれとも文字あまれハ叶たる歌本也こゝにもてして
も文字もさらにもとよりなすらへ詠と云たるかなき物に
准らへて其物此世うに有とおもふ意あらんきはたゞ歌よくも叶ハ

すゝ難しかるを是も六義のはの正面にあてゝいひたらちね
の云々ハ万葉巻十二に垂乳根之母我養蚕乃眉隠馬聲(タラチネノハヽカカヒコノマユコモリイ)
蜂音石花蜘蟵荒鹿異母二不相而(フセクモアルカイモニアハステ)とある歌也是も序歌
なれハなすらへ方るは更にかれたす蚕の眉にこもれるをか
らちもみえぬ其さま蔵りゆく物なれハいふせくといはん
為にかけていふせきハ物此まゝしぬ難くおもひつゝかれきをとい
ふ又たらひをいひおこさんとてたらちねの母かと置るに母ハ子
をいたひそたつるものなれハ也一首此意ハ心もとなくいふせくも
有なれところ妹にあはすしてあるは歌きこゆる也然るを諸
注親乃本にあはれく相見なきみを蚕の眉にこもれるにな

すらへる事と思へるも非也さて蚕を女子に譬へんにハ宜くて妹に
あまたてとゝいふへからんや更に一首此すち通ぬる事也巻十一に
も足常母養子眉隠隠在妹見依鴨ニあるも来に妹をこふんと
いへハ同し序歌なるを知へし巻十三乃長歌にも帯乳根笶母
之養蚕之眉隠氣衝渡云々是もこれか眉にこもらんとす
る時ハ息つかむ若しけに歩みすふさまをいふく其いきつき
といはん序のことく是等ニ哉ゝひこと讀へし親乃やしな
ふ女子をさなと思ひよりさる方にこれつんとく母のかふこ
と同言によこ兼まるハ謬也さて蚕をおとゝいふも引籠まる
方の称まくこそもこなることしまなるのこもこれ其義にて繭

海蚕なともいことふいふも繭もこもりなる意海蚕もこゝも
里て耳目頭尾あらえなるさる此称也さまく捜神記に漢禮
皇后親採桑祀蠶神曰菀窳婦人寓氏公主者女之稱
也菀窳婦人先蠶者也故今世或謂蠶爲女兒者是古之
遺言也とあるをみて蠶母此養蚕ハこれをよめるて娘にたとへ
るなと思ひまとふ事なるまし又後世ハ鳥獣の数乃こゝかふとも
とも云ハ人にもいへりされといやしめたる語にて子字婢僕よち禽
獣まくに至まていふ志めるくはゝこ先くも意なれ逆
やしなふと同義なしく差別あるを知へし書紀雄略の御巻に
天皇欲使后妃親桑以勧蚕事爰命蜾蠃聚国内蚕於是

螺贏誤産嬰児奉献天皇天皇大喜賜嬰児於螺贏曰汝
宜自養螺贏即養嬰児於宮墻下仍賜姓若沙子部連と
あるは是をみるなそのうたは人をもかやく云しより珍誤たるけ
んとおれゆ今も奴僕を幼童より使ひそこなるをやうてるうひ
といひ命の假をを使をうひ教しなといひるたまく古言の
遺まる也 歌同文此歌ハ万葉よりの歌なれとひとつは嬰
云るも此也こい寄物陳思と云中なある歌なれとひとつは嬰
喩也と思ひ誤まる也なすらへ寄物陳
思ハ歌葉撰者の後よりかく歌目なれハ後世なる歌をこのまへてよめるしと
たかたれをとれハ数十首の中嬰へるハゆとよをふく其相さるハ序も
あまたれるも此也大よそを集よせしる相也やうて珍しうもの歌をさしたさこと
る諸後乃歌嬾嬾等之績麻之笑田有者麻懸績時毎二恋波略ル多次
不孟者幸者孟垂者績多見者之欲寸者可毛これらのこうりと云も
たすきと云るをうむといひるけと云ん葉の序のこ嬰
へるにハ此も今ハ養養もひとしき序なるを去るへし さて本書ハ母と所

ろをおやといふるハいふと考るは其たし先ハ母ハ宮をやうてれ
やとしをよまをせるならん新撰萬葉ハ是千種之祖と書
まうをせく書れるをなるもちもを母ハ拉ある事まうふへうら
孫ハ去うをよみなして母親の事とやしなるへしるを書ハを
こうつとこ云事ハ當時の常語まて嬰ひるを事なるをを
今ハ俗ハを嬰児乃乃きをとるをたしまといをを其ハいるを
育つる事をひさすとひ或をひこうとふやうもちもハ其ひ
乃云ハ者うまこうを也いちをやるの伊をすてくちいやるとよこ
なす格をひとしをこうをを佐を金秀の意ををひいくさするを
ふ今ひとふれすといたんらぬしさるハ母乃去るをきなをいやうて

母乃枕詞と調へなすたらぢねさるを古事記萬葉等の日足と書
るを付て足をつゝまる事と思へるは非也何乃業を付日を短
すゝく成ゆくを足をつゝむをなたをたゝくなんを語乃とゝのは
也委くいたらぬ親の守りとゝ云へる説乃所なゝ云へ
兒をつゝまとる事は專ら母親のまゝにゆく親と云へ歟
母の事なれ葉萬なる親たちなんと親なたうひぬなる
ふ類ひこれ母の事也そも母の慰過深き事父の比親を
孫をおもつゝ然也ひなまこゝろをもつ其後遍昭の云る
こゝろもいうれとそを烏玉の我黒髪を掻まゝ有久んと
あるは母とも親とも非也垂乳根も母なる事なるなまい枕

詞をたゝうけく母乃事とゝよまれる也髪をあつゝひゝの
せん事は父のなるなあるを思ふ一是を父母乃とゝ乃ゝる
よるをたらちゝを双親を通しゝくふと思ひとれる後は出来ゝる
やうゝく紀氏之父子れ事をたらちゝの新なるを詠出ゝる事を
ゝとゝを母乃事とゝ云へるを乃ゝ用ひゝれゝる
や覚束なゝ其後父をたらち城母を生ゝちめなゝふ造意の
説之部まつて今たらちゝとあるをそれを後つゝ例乃古注
乃ひゝわさとも尺のまゝと雖波年なを此初句ゝゝちゝとの
まい志ゝくゝれて後人のさかしゝとすゝ
よたなを生とゝへうこ

わのこひいよむとをはさて一ものそうこれ
たまれまきこいよみつゝすともとゝろなるゝ
こをいよろ川乃草本名けさのはゝくゝをまろなをこれうこと
この哥ろ和なんあきさをとたゝめれそゝうことおなゝやうるれい
すこゝさ海とこゝろなるゝすまのあまれしかやくゝ分を見ることを
おもをめくさるきれひきさるゝをこれうこなとやこう形ふゝこうん
我恋を云く歌乃意明ら者一餘枝なる高れ限なすきを演乃真
砂なたとゝきるをめくくゝとゝ歌とするとゝ川をさろ事なるゝ
一せれと真砂を引出くろとつふまくゝみくゝ雙ゝなゝゝろるあら
ねたをとよるをこふを叶ゝをとゝみえす一ものそゝ岩礒まくく

海乃ありをとゝいふゝくこの一ものそ海とゝくゝたをあ事なこのろ
集中るもありそ海れ濱の真砂とゝるめゝゝともあをゝはたを
ゝるのを語をろなるゝ一越中の名所あとゝふたをとゝよりあら
ぬ事諸注る毎者を
○注る岩をよろ川乃草本云く此意を者とゝ歌ハ外相
る注ゝて其意を興者を者ゝゝく其相をるをハゝろるつきゝと
わをなるをこゝ侯をこゝろ和なゝれい者とゝ歌る叶をゝ沢をを
と者の侯をくい家初乃をゝ歌とゝるこ同一ものをるみ男れハ
すこゝさまをこゝろなるゝ一とゝ川をゝて引ゝろ濱磨乃あ
れ所ををゝとゝ歌也ををとゝこつゝろゝ上る云ろ如く

かくてたゞ人言と同じものなれば其まゝにもいひおくべき
をさへいはゞ狂歌といふまじきから放逸突兀たる歌をなすらへう
るもたゞ人前をこそ飄逸の名なれともいふは解すべき強
ちくの翁さの風狂興にあらぬ説んとすれどそは又明らに合
つ所さ物ならぬ大事の沙汰にもあらぬいよく何の事とも
きらましもなきまで須磨のあまの歌も疏部にいけ
はなくかは守く志とうき
以同じ事なきさ世あらせせもいふのはあれ
人のことのそうれしかうますと言ふなるべし
ことはとのそれぞれたしきをなすもこれらさのんざらに風も

すとめでことやいふへうらん出さくらあくまくいろをうつる風花ちるらへく
も風ふらぬよふ
俳諧のなき世にはこれも疏部に出しまたそこに解せざらく
たものはもよそす又序も枯も用ゐしはよく聞ゆる方よりぞく
ことを歌に出せるなるべし土佐日記に　船舟の綱手長き春の日
をよ我へいかまで我たへにたまさく又思へる事を九たくことを
ろ云ことあるこそ船中に四五十日経るといふ意をやうくよそ
かくのまでへにいかといへるをいふに不堪なりとて餘り只あらを
とまらひそしもたる意也とそれて云歌とは其詞をいさゝ
て只平言をさとくの如きの文也詞をいはゞ一其をかまくなるか

しる雅しき意をいさゝかゆるくしるたちをも此歌を調さちや
ゆゑ出けるくいまたく言とつゝきすつくなるんや

○注に是を事とのゆりゑことゝ所これ名義に拘を
らも雅にあらくゝふなれも例乃海をへこうゝ山橋云くを
第盛の歌をを平此せるあへるを下に楽めゝ意をいと長雨
にめくくゝ調へなしこうをいこうくゝ是をくこことゝいたん又雅
まに當まちとを尺こうなふへこうゝ為事此さてと先
歌云くい寫誤乃顛倒なるへし此所の末こをぶこうゝ為世ゝと
ふを兼くこれ歌とやゝふへこうんとあをし一句を花の注歌
の意更に乱いすれ下に云とあやまちく書へこう本のを

く弘まをしこうのとこうゆをそを此歌此ところをこうふうれをす
これ歌とやゝふへこうんとなるを云のつきをそを何乃事とも
きこえをいとめを所とゝやゝ云こみをつひにあらん事にをこうへし
たゝ来これろならん今の如く歌をのこ書をそくいは其こと
わををつきす前後の例にを違へこうあをせれいは原本を此
歌此ところをこに此をたゝ山さこうあくまをくを云こを花ち
こくも即以為せるこれ云とやゝふへこうんとそ有名んこうを
事此とくのわをを正しきを此歌とやゝふへきと山橋乃所の
雅の意をよくこれへこうを云をこのとこあと字形も似これい
きいはめくさこうあやまをゆるへしをとこうをとあ云とゝふ事

是ハくしをあるゝ事也

むりまいたちひうこ

これとあたむへしとみるをさきなれ

みつをよりたふとめはたりせちとゝいろなるへし

されハ世をほめく非なはゝるなをはうこいたちひうこと云ふ

れんあろ玄の秋なるなつこりくよろつ代といたふこころを非そ

ろうんこれらやすうかなふへうらんあるよろむくさなわのもんこと

もえあろまりきことになんん

此殿ハ云こ催馬樂の長歌也これ殿ハ同しなをうらうするく

富さうえまりるをこりたよつをる殿造りせるたとをめろ

しをたくほめたゝへるる也栄華を何をあれと先を家造り

ろいこの先くきうくまるいちをろさものなれをかくこうを

さき草いこりとふたん為れ枕ろ事諸注ま毎ろ如しこ

つをよりたゝこ增田增うくあまこれ軒端のとのく赤ちろひ

或を立かをれをるをいふ又軒をはまるをいたこうまよりま

乃音便すをも有しいつをまるをを意ハこのるすむいた諸宜の

字なををあるく俗ま名ふをとゝたんろ如し古をうへとゝいろ今も

猫うへと呼ふいき事なを秋部の吹ろふこれ云の取ゝいろ

さてこれ文のく注詠をぬさろ時をむつまいたひ云の今の

世中をつれをるく注くきをなをす試ゝいたく六月ゝをたい

ひ歌なりとて世のともがらめなど有つらんせかれ言を本文とせる
時とり捨くるなるべし古本をえて正すべし　春満いはく此いまひ
歌こゝろれ言もこゝろ
そ有べきと上なる一句を引かゝりてきゝ入るゝ所也さてこゝろ意
まるまるせんもあまりなるまで文意さへかくるもの也こゝろ意い歌まい
やうの六歌あるをたゞるまで今乃世中迄まいきとかたらく六義を
正しき方まなしくいるなまいの六つまを歌ひ歌也今れ世中云ことつゝ
うていこのなかいこゝらす世一句あひくまをてを滋意はらぬこのさる
ろこがらすもまなくてを詩學まあくさる勢ひをを得さるもの也
○注まは是い世をほめくく云ことを更まいちひ歌とそ見えを
いまひ歌い神まは法ゝるる意なくくいかれたすと難しゝる也
例乃頌まあくくたるいまというて神まつるをもくいたひ言
と定めん又世歌いこのくらいたひ歌まあくこゝさらん詩序まは頌
者美盛德之形容以其成功告神明者也といるも德功をか

めて称へあらるこそあらめ神明まは告るといふい事也上まて其
詩まいつつらす其德功をうくふすれいち神まは告る也さる
を神まは告る意をよむ事と意得く神ろたるらんの言を引さ
るいををれしさくまこ神をたるらんい神まは告るといふまをあ
らまい猶あうぬ方まは思いるよをおしかるべいこゝらんと云る也言
乃意い賀神まとけを大よそ六ゝをまは云こいた和歌をこの形さ
の六義まは配ちくうまくいれいん事い其事たるひこまい得
るまきき事也といをを初めまいるるく世六ゝをこのたるこれ六義
まよりるをといとも更まこれこさまは名義を立られるまい強
く風賦等は義まは説いきるあらをさらい強迫乃意このれつら

ん也といふ事ハ名義のくはしからぬ事也しかしハ竟ス

十寺此論多くいつれとさだめがたく

いまの世中いろにつき人乃心花になりにけるよりあだなるうたも

はかなきことのみいてくれハいろこのみの家にむもれ木の人しれぬこと

となりてまめなるところにハ花すゝきほに出すへきことにも

あらすなりにたり

今此世をみるに人情やゝあさはかに成て色に媚ひ花にてらふま

こと志とけなき歌とりへなき詞のみよみ出くまてハ只色にふ

けるすき人乃家にはうちくあつかはさと成て正しき雅

にてハなかく親ふへうもあらぬ面ふせを見る事に成ぬと也ここ

はゝの上にも頭を難波なとにも家にめとこめこの詞をいひさる

男ことわさよろしきにも似たれとも成たゝさきあまりなくい

らく次の句調まろくころもれたもたち當通此ままになきそ

正しき風くらくもさる意此外にも聞えさる也又よにもちの風お

事はことあるたこにまあるところよりらす又はかにも出すとい

へる出すの意を真字序に何しく意得て難進大史之第と書る

ハ例の譯也およそほにも出るたゝらぬこ事也これた花のにも出すへき

たあらはてことにふすくさるおもやけならんおくをゐてハうけ

てもとゝも出ぬ事にそやうて上なる人志まぬと同意也仲哀紀

の幡荻穂出吾也（ハタスヽキホニイツルワレヤ）とあるもいはゝ吾也と云る意なるをも訛

とすべしさて當世詩乃こさかえて歌は廢まくる事ハ實なゆく
ゆとみて歴史中にも詩の事とゝいハ大ふとゝ形くことくくこれ
と挙るまこ所は上いたくさくこゝ形くこまく當時三式の授なく
るとゝいとも唯詩はうゝべとうゝやこたる心より事なくて中こ歌のお
もてふをゝ形るもの也世後やうやくに興りて再ひ古ようゝ来るる
い實に世集乃力といふゝこさて建久正治の比よりあまるに取ハ
やこれて群德乃祖百福は家と貴こ或と理世極民の鴻基と建
く朝廷さうんに行とれ其實と妖艶浮華に流く傳波今に至
まゝ抑このハ思ひとのふる外なきこ中に男女は情ハ更に風月乃
感のおのふゝき所なるゆゆく歌乃廢まくらん時ハおのつゝ好

色の家に持こ殘るべき理なまこれと當時は愚へ世るい切く誠
實は先ふゝうゝこ源をひるるたまゝ後世乃さうんに為ハ或ハ
秘授或と注則乃事こしきはこ實ハ只宮殿中の遊び草と
成く誠実失なまゝるる世後のさゆんなる歌當時は愚へるに
世えて及いこ源をうゝべなるすや
ゆゝはこめをおゝべいめるゝれんあらぬいすゝのよくは見みるとはるの
これのあゝこ林は月乃よゝとにこふふ人こをゆくくこと乃つゝ問く
うこをゝくまつらしめゆふ
其本をゝこせいゆく好色の家に乃こあつうふゝこやうは拙に乃ハあら
す古ハ世こは帝時くに色と数ひ世まひ侍ふ人こるを乃は花

よつの月のよせうく仰事あるべしとうけたまはる花のあるべしといふ
いはさるべきにはいはぬこころしづかに歩みまはるべき詞のあらずこそ月の
夜とふべき對へうなきまと月の夜に絵なきもさびしとこれより
ふるく萬葉中にも四季の花林の葉の少なきに類多くれいれさて
有なん妻ゑを別に海あまの大井の事の詞の序文に嫌あるべ
家に妻つるなとあるに家をてゐたく文字のことをいたれるに似く
侍りに詞をなるべきこころすさくに數の詞はこころ漢文の制より
流出まくるべき弊まて紀氏も四季の勢ひにかつまくたまく是たる
月に事に有なるべし建久の比に歌をてむけるいたれなき
言葉の起りは其ことにて前をりとつゝ

あるい花をそふとくたりの月をおもふ
てあるべきやうにこそ思ふ人のひてさかしおろかなりと
ろめりん
花をそ定一本花をもくあそふとあるは詠ふべしとくいれと
字おちくるを紀氏の自筆とふ陽明家の清本もたのるより
柳原亜相云宣旨の後拾遺の序も花をもくあそ八島をあそ
ぶまゝとつゝふ事なりとあるそふとそと有ハ何の事とも聞えす
除桜をふれ寫誤なるんといふをとおもふるをくの花を詠ふとたん
も同なるをぬしちすさくに花を詠ふとくに便りをきこ所なるまとひと
たゝ笑ぬさまを敬ふる跡の野山をとるひあるを雲ある筆をよちい

あるハ匂ひなき梅のまとふを月をおもとなく声ゝ雲ゐ
ゝとれるとハ出んをまち入ゝを待るひく霞あり月をもさ
ゝ
ゝのハ面白ものをまものあるハ光うとき本源をまもてゝ
ふこハ上る花はあゝ月は夜とくあるを新くこゝりさる人ゝの
花を月をかこちよもてく奉ものを風雅の情を思ひたるつてあや
を書なゝるを也ゝ君臣と別をていんは庭まくハさすを
頭を数ものくを実を歌はとを歌はとを歌はとを歌はとを情のゆくをまを
くかは便をはきを月をまとひ晴をたとれるとをはをはを真心
ををつひ出めりさるゝひくをとをはをあつめをく其質愚をも
うち知ゝをこまひんをを　徐枝を花のあるまゝきをまを月はなを
暗を月んをたとるハ愚なるを人乃云をもをを

あゝ面方をこゝろをめゝらすをまを花を吉野をたゝ川称月を焼すてをなるのむる
ハかゝこきを也今を愚なるこゝをあゝくをこゝをあるをすを也と云ハ
非也こを教長卿泊をたゝちなをを所云こをハ花歌月歌ををるくをむん
なををあるをををれるなゝ一頭服これを波しく世義いゝく上下の心を風
ををや是を花ををつを月ををくあをふこゝをををを心をいをを
云をををををを去るゝきを事也いゝを愚風ををて侍ひくゝを奉るはこゝを
の人は花乃あるをまをを月はなを風を月んをを乃こんをを
ゝをさんやをはのを愚昧なゝんを雅乃人ゝをみゝをゝをゝを何をゝを
ふをををくあゝいゝを事を侍ん又ゝをゝを乃こを奉を事たゝ一人やゝをゝを
ををかゝをゝをゝをあるをゝを愚なゝるのをを書ゝをたゝをを遠ゝ又
んこをを乃をひをくをゝをけゝゝをを質愚の心ををををゝをを中
を質愚はんあゝを事海をををまを方風を新国乃を中朝をを奇を
ゝくひをの質愚ををゝを及京は例国史を乃をゝゝを事をゝを雅
ゝをゝを也を肥也こを京をを人乃質愚をををを氏
の人をを古は要を質を乃をゝを所んゝゝひあをゝをんを推
言を奉ていをれゝを也をゝを事あをををゝ定をゝ一をを肥也国史等を
載ゝを事をゝを和ゝ一を人をゝをゝをゝを書ゝを或を花を
数ふをゝをゝをゝをゝをゝを作者乃意を述ゝをゝをゝをゝ一ゝこハ
真字序を蓋見上古歌多存古質之徒一本為耳目之娯徒為敷衍也
端云ゝ君於之情也斯可見質愚之性於是相分所以遺民之欲擇中士

之者也とあるはのこなつこくこれ假字
序の意ばよくを解せざるまのなり
志の行るはこまあしすせこれるよくまくたくたゐようけくさみと
神ゑひ

ちらたやらはとのこるしすれの思ひを述んも法言こそあれと
ひろく其用を筆るまさらくまとりい多く集中のこゑよ意詞を
取よそひて文を成ることを諸抄を引るめ一合せんるべし
よ後こひ身をすきたのこんゐあまをふーはらふりをよそこく人
とこひまりむーの孫を友を志のひ高さこすはえの松をあひお
ひはやうにおもえ
題注云あひおひとハふれの生命遠第はを友と思ふ心也云こ除地

云あひおひ相生也俗を常をふ言也恵慶歌集を屏風を子
日和二葉ちりおはしてもひとてしの所今ゐちまり々る世人の小松
を新古今を大貳三位おはの小臣乃山はは小松原今ゐちの蔭を
待なん云こと云り按ゐをあひおひとふ詞をやくをより有つらめと
物をひとえるい歌序始めはまこと拾遺集を安法こ師 天隆ゐあら
人神のおはを思はを久し位古はは松なを不上を筆ゐ恵慶三位為
乃云あを高砂住吉はは松い老ゐ例をよめゐ古歌こはこさくい
一ゐ々を今も同一年こゐを生ゐこん人をれはをとゐも古云の遺
まゐ也舊説をあひおひとは相逐也互を追すひなるやうふや
也とゐを遠続をを張しくゐを也相逐乃意を繁のと

なりて色いたく変ぬ方あり又古歌の意なども皆違へり古来乃相
おひ理りも半ばひくもやうなるべし春風い是を相老乃意
として偏字をも改めつるか 然れども五月老くるをあひおいと、
いふ事着よりも例をなす又相おひ乃やうなるおかえとは相おひ
あるべき物と志のおかゆゆとつ迄今た相を我も老くまいまとに
相老なるまやうなおかえといひくせんやんや思へべこれも老
たる心よりも非情乃松の老くるをも貴き友なるそつられて同一
感のおとるやと平とハ思ひなさるくわつまれき感哀をこそ
男山共むこりと思ひつくくをこれ一の一時をとらるみをうくをいひく
そなくさ先なる

是を集中に今こそあまと我をむこうい男山栄松く時も有こ一
物をとふいろ歌乃意をとも秋乃野ゆみまめき立る女郎花ある
ものすを花を一時とよあるこの共詞よりて男女老くに共述懐を
いふ也男さうを共着と思ひ少女するこの夢の間なるを悔るみを
歌とよこそ初く人しれを思ひをるに共ゆ更なくさむるきなん
明きと山を一本思ひ出てとあるい用ふこうす
又さるあり之さる花共ちるをこ林のゆふくまに本乃紅のおつるを
きこ一のろいとーもとふこのくみれうけるこのゆ雪と波とをなるき草の
つゆ水の流をとんくわつのこをおとろさ
こそ林の夕暮とある著共詞いく後に平と書そくるるや春

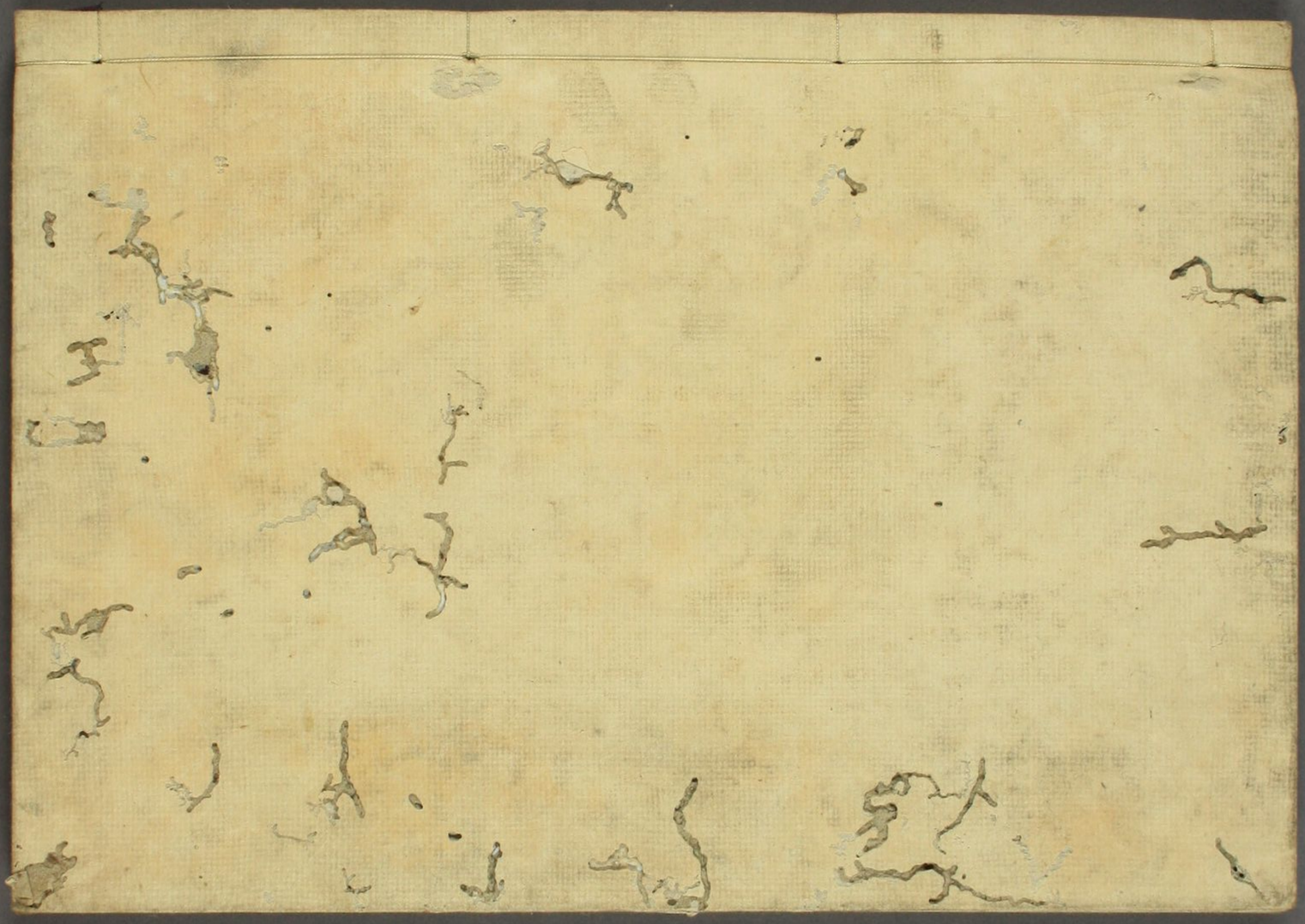
乃羽はむかひの杜の夕とそ思へきさくそ詞もとくあふへ
くおれゆ暮春を待て正しく一次する杜のゆふへ立田川云々春
の河さはよりは山云々とあるをも思ふへし雉波本はハ杜の夜ふ
あはれゆふへとはたんはハおろく仏ちすまと一本なまと出波
ふへくるそ夕暮とあるは清さをぬ一ト
あるハきのふハさのえおこるて時をうしれひをわひきて一ものを
しをうぶくなをとのろた松山乃波をうけ野中の水をみこ
きはふた栄えおこるとくのトをふハ乃一句脱るを雉波本は
ふハはをうなひとあるうぶしきりはすなくてハ文をあき
す諸注はを失ひせるをひとつをくこそろろ〻ろい袋也こと世

よ在俗ろよ法く親しうをし中もおのつろ踏く成約とふ之の
一句也されたろ明らすせるをひとくとて文字あるしなくてそ句
のつろを成さろ事也かれはを先ひくせるわふろ乃義を思ひと
ろ時ハて文字あまをて同えぬ事となまをハみそちを取まく
たろ成しーさく成た松山乃波をうけく契をのろハ狩中れ狩を
ムこそく爺ハとつを也
杜たちきれ高きをなりああうきのちきれたるうきをこの我ハ
物をのをたやく萩乃下葉れ色はろハ又なくのたれを殊文字
ろ鳴乃羽高を称さあてきムをいうを悲しかりをちんト葉をな
かめとハつくくとををハくを思ひしむ也狩うきをこの我ハとそんを

みちくいさぐりもおとさぬを以て大よそやうやうにてもきくに
向すくん人いふく就れこゝろもゝ思ひあつまりたるものなき
所なまとひもとゝ人ゝ家の園なたとゝろとゝ出るをもめ又さこれ在なた
こゝとゝろあり是まてしきくに向しをまれるもゝれき事をおそ
ゝたゝいは後世の難を本とし文を脚てはやくこのきれを類ひ
まあらす思ひあまりてなるくしくつゝられるものを世ゆ
ゝいうるとなまいはさゝ拙の家をもゝるん事ハ人とあるやき
思たゝきを幾しきもいみ〳〵今は嘉さゝふまきなきけま
して彼あめりちをつゝまをおまゝやうなのまゝるをたく氏さ
ゝひまこゝなまいをゝるゝ路情をうなふ時ハ寂そむき親ゝる

ゝにてゝるゝれを家をとゝけゝるより氏をきをむゝまくゝの一
まちをとゝれまてなゝ得ゝるためを向を事れ淡きま似ゝゝる
をゆておゝそゝまゝゝ事をみゝれ匂ゝ鮮ゝてんもゝくゝしゝゝまハ
たく表三匂を得ゝ おゝり路意を推ゝくゝれゝゝ等困ゝゝあを
まを向ゝゝるゝきゝや

本朝六國史　全九十六冊
日本書記　小寺本　全十五冊
同　黑羽本　錯乱備考付　全十六冊
釋日本紀　全十五冊
日本書紀通證　谷川士清著　全三十冊
續日本紀考證　全十二冊
禁中方名目鈔　全
小朝拜始道郷食祭終其余臨時篇○私儀篇○言脫篇○殿舍名篇○人躰篇○院中篇○文書及車馬具篇○衣服篇○裳服篇○三至之不決記ノ恒例公事　禁中ノ名目悉集ル書也
神代卷　全二冊
同　古訓考　全五冊
神武卷　全
神道大意　神道演義
神名書　全
神代文字ヲ不残集テ旁ニ國字ヲ以是ヲ和解ス

延喜式　全五十冊
神名帳　大本　全三冊
小本
大祓詞後釋　本居大人著　全二冊
神家常用祓神家要術
裝束圖式　全二冊
御冠○袍○礼服○下襲○半臂○袴○單○大帷○表袴○大口○石帶○劔○平緒○弓○胡籙○箙○綬○笏○扇○鞋○靴○烏帽子○直衣○半尻○狩衣○奴袴ノ至迄不洩図三頭ノ巻ノ註釈ノ如官位老若ニ依テ色目著用ノ差別有リ其余種々但記ニ至迄具ニ記ス
唯一神道名法要集　全二冊
新撰姓氏錄　全三十卷
職原鈔　校訂　大本　仮名附　小本
百官畧表　両面一枚摺
竪ニ官署列ヲ示シ横ニ職掌次第ヲ著ス乃チ唐名ヲ配當シ又各官僧官位署式等ヲ附錄ス百官夫々ノ知ル即眺見ノ書ニアリ
官位昇進指掌圖　一枚摺

國學御書物所　京都三條通堺町　出雲寺松栢堂